

放送人の会

No. 53
2011・11・4

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

代表幹事 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (会報編集長)、鈴木典之、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一

事務局 佐藤真美子

第11回 日韓中テレビ制作者フォーラム札幌大会 2011-9-22~25



参加者名簿 (順不同・敬称略)

韓国

崔彰鳳、申相容、李年憲、黃大煥、李昌燮、
李廷植、李昌鏞、金洞爽、洪石九、文亨燦、
鄭允煥、李洪起、金熙秀、李殷杓、鄭惠江、
金山、許陽宰、李璟恩、方娟珠、鄭秀雄

中国

冀星、黃有福、李亞威、佟奉燕、高松、
李劲峰、張同道、孟凡耀、華迅、鄭又淳、
鄭少康、吳建宁、范伟清、孫永明、李汝建、
馬湘云、都曉

日本

音好宏、鎌田靖、金平茂紀、柴田幸裕、
久保志穂、山田良明、橋本美美、小玉滋彦、
牧之瀬恵子、臼杵敬子、池田正之、鈴木嘉一、
原真、隈元信一、安斎茂樹、信井文夫、
吉野和美、橋本隆、小田桐誠、中町綾子、
中島好登、高橋秀樹、松館晃、筧昌一、
峰野千秋、谷村啓、馬越直子、大園百合子、
内田康子、原田令嗣、石橋冠、伊藤雅浩、
今井義典、大山勝美、荻野慶人、加賀美幸子、
金子ときよ、隈部紀生、小池勝次郎、
河野尚行、後藤和晃、今野勉、寒河江正、
澤田隆治、菅野高至、鈴木典之、曾根英二、
田中則広、辻本昌平、中崎清栄、藤久ミネ、
前川英樹、松尾羊一、村上雅通、山路家子、
下崎寛、高梨裕司、渡辺紘史、山田尚、
林健嗣

写真は小樽運河の前で。9月24日夜。参加者名簿の全員は写っていない。

フォーラムのあと

代表幹事 今野 勉

「日韓中テレビ制作者フォーラム札幌大会」が9月26日に終わったあと、私はひきつづき札幌に残った。27、28日の両日開催される「第1回アジア旅番組国際グランプリ」に出席するためである。

「アジア旅番組」を企画し、事務局長としてすべてを取り仕切ったのは、当会幹事の林健嗣さんである。林さんは「フォーラム札幌大会」の実行委員長でもあった。

林さんは、二つの国際会議を同時に仕切ったことになる。なぜそんな苛酷なことをしたか。

ひとつの運営事務局二つの国際会議を運営すれば、経費はそれぞれに分散され、フォーラムの負担分がそれだけ節約できる。不況の折で予算の少ない中、赤字を出さないための苦心の策であった。林さん、苦勞さまでした。

私は、その林さんに「旅番組」の実行委員長と審査委員長を依頼され、喜んでその任を果たすことにしたのである。

「フォーラム」関係者でひきつづき札幌に残ったのは、林さんと私の他に「フォーラム」の常任組織委員長である韓国の鄭秀雄さんと中国電視芸術家協会の王占海さんである。鄭さんはコンパティ

ションへの出品者として、王さんは審査員として出席した。そして、私はこの「アジア旅番組」の場で、鄭さんと王さんの、これまで知らなかった事実を知ることになった。

鄭さんは誰にも言わなかった

「旅番組」の初日の夕方、鄭さんの姿が見えなくなったのでどうしたのかと聞くと、体調を崩してホテルに帰ったという。

翌朝会場へ向かうバスの中で鄭さんに体調を尋ねた。心筋梗塞の発作を起したとのこと。驚いて、はじめてかと思うと、数年前、パキスタンで取材中に最初の発作を起したという。

鄭さんの出品作は「微笑みの道」というタイトルで、仏像のいわゆるアルカイック・スマイル（古拙の微笑み）を、日本からルートといわれるギリシャまで、シルク・ロードに沿って長期間にわたって取材・放映したものの総集編であった。パキスタンに取材のため入国しようとしたところ、戦争状態で危険だったため真夜中に秘かに入国して国境近くの民家に隠れていたところ、近くで戦闘状態になり、弾丸のとびかう音を暗闇の中

で聞きながら朝を待っているときに、初めて心筋梗塞の発作を起したのだという。鄭さんはその事実を私たちに一言も話したことはなかった。

ここ数年、韓国の「フォーラム」関係者の間で問題が生じていたが、いつになく鄭さんが弱気なのが気になっていた。弱気にみえたのは、そのせいもあったのか、と暗然とした。

鄭さんの「微笑みの道」は受賞したがその席に鄭さんの姿はなかった。来年から「フォーラム」を離れると表明した鄭さん、長い間、苦勞さまでした。

王さんはドキュメンタリーのプロ

王占海さんとは毎年「フォーラム」で顔を合わせてきたが、親しく言葉を交わす機会はなかった。「旅番組」では「フォーラム」関係者が少ないということもあって、林さんと3人で食事をする機会があった。

これまで「フォーラム」に出品されてきた中国のドキュメンタリーはまるごと再現によるものだったり、あらかじめストーリーが決まっているドキュメンタリーが多かったのに比べて、今回の「札幌大会」での中国作品は、見応えがあったという話をしたところ、王さんはドキュメンタリーにおける再現ややらせは非常に微妙で難しい問題だとして、次のような例を挙げた。

長い間別れていた親子が再会することになり、その場面を撮るためにスタッ

フは子供の側で待っていた。母が現れたが子どもは気づかない。その時スタッフの子供に声をかけた。その声で子供は母の姿に気づき無事劇的な再会の場を撮影できた。その時のスタッフの声を聞かされた。今野さんはどう考えるか。

王さんは、私たちと同じレベルでドキュメンタリーの問題を考えているプロだった。日頃は、自らの国から出品された作品について無言を貫いているが、あれは容認しているのではなく、じつと見守っているのだ、と、私は初めて気がついた。

得ることの多かった秋であった。

日韓中フォーラム札幌大会を取材したNHKの放送が決まりました。

NHK ETV (教育テレビ)

11月12日(土) 午後2時から59分放送

テレビシンポジウムの枠

「震災 テレビはどう伝えたか」

～日韓中テレビ制作者フォーラムから～

緊急フォーラム(9月23日)

1部 「震災テレビはどう伝えたか」

資料上掲

「震災後100日 揺れる日本」(韓国KBS制作)

「新しい家」(中国四川电视台制作)

「震災後100日」は韓国側が東日本を多角的に捕えた力作で、中曽根元首相など要人が外国メディアだからと無防備に語る部分が興味深く、日本の今後に触れる指摘など「Nスペ」的な視座に徹して、客観的に表現していた。中国は四川大地震のその後を被災したパンダ保護の動きと地元住民の軋轢という側面から描いた作品であった。

2部 シンポジウム

モデレーター

音好宏(上智大学教授)

パネリスト

鎌田靖(NHK報道キャスター)

金平茂紀(報道特集キャスター)

キム・ヒョンソク(KBS P)

ホアン・デホン(KBS 報道記者)

李勤峰(四川電視台 P)

高松(四川電視台 P)

フォーラム2日目は、幹事国として東日本大震災にみる災害報道の検証にまると一日を割き、恒例の作品鑑賞、制作者の制作意図説明と会場からの評価、優秀作品選定という会議進行を大幅に変更

した。

東日本大震災をめぐる、現場は極限状況下でいかに取材したか、また当局の発表をふみこんで報道したか、被災者や視聴者は送られる内容をどうみつけたか、権力への批判の姿勢に問題はなかったか、など抜き差しならぬ問題が山積していた。

NHKの鎌田靖氏は「追跡&Att&Z」で医療問題をテーマに3・11に遭遇、春編成で終了する最終回シリーズは中断、特別報道体制下に入り、取材に当中継など、現地取材に没頭したが、まずNHK神戸支局在職当時遭遇した阪神・淡路大震災との違い、その体験が生かされたか、生かされなかったか、という反省から問題の核心にせまった。

ついで金平氏はまずJNN系列の被災地当局の活動を映像で紹介。津波に遭遇し、格闘した唯一の映像の迫力は「ニュース23」で知られているが、渦中の武田弘克記者(東北放送)の身辺で提起するものを訴えた。武田記者は町中に押し寄せる大津波に会い、身の危険を顧みず取材続行か、屋根上で助けを呼ぶ親子の被災者たちの救助を優先すべきか、とつさの判断の余裕のないままに辛うじて救助の一部始終を撮った。しかし、武田記者はしばらくはショックで立ち上がれなかった。彼が語るのは人命救助か取材か、ではない。カメラを放棄する「美談」に与しなかった自分を責めるのだ。

表現の自由が極限状況下で根源的に問われているのだ。そこから金平氏は中国の「新幹線事故」における中国メディアにあえて問題提起した。(さあ、面白くなったぞ!)。例えば、テムジン(制作会社)経由でわれわれが知る中国事情の文脈上で中国メディアは果たして報道したのか。落下車両を埋めるシーンはすでにモバイル映像で全世界は知っている。金平氏の問いと会場の複雑な微笑に耐えて答える中国側だった。

天皇制下のマスコミ事情を幼くして知る筆者には、ジャーナリストの痛みを共有しようという金平発言の真意に中国芸術家協会の王鋒氏(だつたむ)が「金平さん、中国へ来てください。そこで話し合いまししょう」(笑)。この回答の面白さに今の中国が動いているのではないか。中国は変わる(にちがいない)と思いたい。

問題の根の深さについて会場から水俣報道の村上雅通氏と曾根英二氏が発言し、東日本大震災にみるジャーナリズムの挫折をすでに公害報道でわれわれは体験していたと言う。「水俣と大震災報道には共通点が多い」と村上氏は続けて「公害発生当初、学者たちは水銀犯人説を無視し結果的にチツソに加担し、国家は積極的に隠蔽したが、残念なことに化学的知識に無知なジャーナリストは対抗する術がない。被害状況を情緒的に擲うだけだった。告発したのはごく少数のインデペンデントたちだった。水俣

報道の挫折に東京電力にダブる。挫折は繰り返している。

「膨大なゴミの山に『豊島区』の荷札を見つけました」と取材中の豊島の惨状から曾根英二氏は語る。

「豊島の島民ははるか彼方の大都会は知らないが、負のかたちで繋がってる都市と離島のように、恐怖の放射能汚染が離島のゴミのような関係で日本列島と繋がっている。公害報道の度に立ち塞がる国家権力とその下の産業資本の構造を想像力で明かせないもどかしさ」を口々に語る。現場のいらだちは取材当事者だけではない。被災地から避難してきたという主婦(宍戸隆子さん)が会場で発言した。「皆さんの意見を聞いても、マスコミは原発事故で政府と一体となつて真実を隠し、本当のことを伝えていないのではないかと思っ」。



宍戸隆子さん

公共が前提であるマスコミ報道が公共の概念をめぐって、国家権力と争奪戦を行つている。一見そう見える裏で真実が漂流している。

最後にモデレーターの音氏がとりあえずの結びで「分断された日本で、文化を守るのがプロの表現者の個人の意識ではないか」と語つたのが印象的であった。(記 松尾羊一)

「愛国ジャーナリズム」と 「公共善」 大山 勝美

第11回の会場・北海道大学は広い敷地がたつぷりの緑に包まれている。朝早く、よく散歩した。どうしてもフォーラムのことが頭にうかぶ。

来年から中国、韓国とも主要関係者が一新する。承前でなく再出発である。フォーラムの参加国やメンバー構成も会の目的も話し合う必要がある。自分は主要な役割から身を引くにしても、考え方は伝えておきたい。思いの堂々巡りは歩きながらつづく。

番組の表現レベルは、確実に上がってきた。ここの中国ドラマ「野鴨子」は、じゃじゃ馬のようなもたらわれっ子の宿命親子ドラマである。財閥の女社長が他人にあずけた母親とわかり、少女をひきうけようとする。しかし娘は、母親の運転手に恋するなど反抗的。韓流ドラマのような波乱万丈の母娘劇である。なぜ、この番組が中国で大ヒットしたのか。海外には伝えられていないが、貧富の差のひどくなった中国では、他人の子をさらって売る犯罪がふえているという。そのため都会の有名校の退校時には、子どもを守ろうと大勢の父兄が校門に押しかけ話題になっている。ドラマは、その社会問題が背景だったのだ。

KB Sのドキュメンタリー「大震災100日、揺れる日本」は、鋭いふみこみ

が刺激的だった。評論家青山氏の原因事故から問もない内部映像。中曾根康弘氏の「頑張つて、日本を一流国にしたから原子力を推進した」発言。河野自民党議員の「利権にむらがつた族議員の責任」論などは、韓国メディアだから日本人の目に触れまいと気を許しサービズ発言した結果であろう。

国内マスコミは、知っていても報道できない伝えられない身内への配慮がどこか働いている。今回の共同シンポジウム「震災をどう伝えたか」で、中国のドキュメンタリーをめぐって、TBSの金平キヤスターから「報道は、政府や権力べつたりでなく、距離を置くべきだ」の発言があつたが議論は深まらなかった。日本でも「マスコミは、原発事故で政府とグルになつて真実を隠し本当のことを伝えていない不信感がつよい」との福島から避難してきたインターネット派の母親からの会場発言があつた。

企業ジャーナリズムの民間放送は市場原理からどう抜けられるのか。「記者クラブ談合報道、管理されたなれあい愛国ジャーナリズム」をどう超えられるのか、市民のための「公共善」を、どう伝えられるのか。発想の転換が求められる。もはやインターネットが無視できない時代の資本主義下のマスコミのあり方はどうあるべきか。11年目に入ったフォーラムは、重い課題を残しつつ、関係者の頭の下る尽力で無事終わった。心から感謝、謝々、スゴハシヤスマシダである。

テレビは大震災をどう伝えたか

河野 尚行

「伝えるか、伝えないかは、報道する側が決めることではない」。原発事故報道で危険情報が少なかった事にいらだつた自主避難者の代表が発言した。日・韓・中TVシンポジウムの会場である。

「ウラが取れない情報を垂れ流すわけにはいかない」と、マスメディアに携わってきた者として、直ちに反論したかった。だが、待てよ。原発事故後に、マスメディアが伝えたニュースの現実と、被災された人たちの、その時の状況を考えると、一般論では反論出来ない。そうした意見が、避難すべきかどうかの情報を求め、迷っていた被災者から出されても仕方がない。残念ながら、そう思う。

現場を踏めず、発表情報の裏をとるのが困難な状況の中で、何が精度の高い情報なのかを見極める事は、パターン化した取材体制の中では難しい。アメリカ取材の番組を見ると、GEのマーク1型原発に詳しい科学者が、事前に予想した原子炉のメルトダウン開始の時間が、実際の福島第1原発事故とピタリ一致していて、インターネットに流れた情報の中には、かなり精度の高い情報も混じっていた事に、改めて気付かされた。それに加え、会場で、熊本放送で仕事をされた村上雅道さんが持ち出した水俣病の事例が説得力を持った。村上さんは反省を込めて水俣病報道のマスメデ

ィアの事例を列挙した。放射能汚染と違つて、水銀に汚染された水俣湾一帯では、見つめようとする問題意識があれば、誰でも現場を持続的に踏むことが出来た。だが、異変の正体、患者を生み出した原因を探り出したのはマスメディアではない。職業ジャーナリストは、一体何をしていたのか。

会場を巻き込んでこのシンポジウムが、中国、韓国の放送人の前で繰り広げられた事に注目したい。寡黙であつたが、感受性に富む30代の中国放送人の目の前で、議論が闘われた事に注目しよう。既に11年の歴史を重ねた日・韓・中テレビフォーラム。この10年、中国はGDP世界第2位の経済大国になり、多くの問題を抱え込んだ。韓国の国際化のスピードはめざましく、韓流ドラマは世界を制覇した。これからの10年、隣接する3国の関係は…その中での放送人の役割は…

たかが年一度の会議ということながら、世代を超えて継続する事の意味をかみしめた札幌大会である。

北海道パワー 中田 美知子

冒頭申し上げておくと「第11回日韓中テレビ制作者フォーラム in 札幌」では私はさほどお手伝いはできていない。全部STVの林健嗣さんが実行している。わたくしは「いくら何でも北海道は札幌で重要なフォーラムがあるのだから、ラ

ジオ局勤務とは言え放送人のひとりとして受付でも良いのでお手伝いしたい』と、おっとり刀で駆けつけただけである。

ところが林さんが開会式の司会という重要な役割を下された。開催直前の打ち合わせ1回で、忙しそうな林さんからこれまでの制作者フォーラムの10年をまるで歴史絵巻のように聞かせて頂いた。船上で最後は喧嘩になったという初回の日韓フォーラムに参加してみたかったなど今更ながら羨ましく感じ、TV制作者としての切り口を逸脱せずに討議すれば政治を越え、国境を乗り越えることができるのだろうと想いを馳せた。

また初日には通称「松尾Bar」に呼んで頂き、近くの店舗「セイコーマート」でビール、ウイスキー、焼酎を買い込んで差し入れをした。林さんが予約したホテルの別室に松尾羊一さんを中心に有志が集い、あちらでは中国のドキュメンタリーを熱く語り、こちらでは作品の評価の視点を藤久ミネさんが解説している。そこへ堀川とんこうさんが参入してくるといふ誠に贅沢な空間だった。そう言えば23日行われた市民参加企画緊急フォーラム「震災 テレビはどう伝えたか」に集まった北海道メディアの面々も素晴らしかった。HBCの溝口博史常務（平成13年文化庁芸術祭放送個人賞受賞者）や地上デジタル放送の全国的な牽引役として知られ、東アジアのメディア事情にも精通しているH.T.B.樋泉実社長など錚々たるメンバーが一堂に会し

た。当日お見かけしなかったHBCの前社長ホンカンシリーズ等ドラマで著名な長沼修氏（現在は株式会社札幌ドーム代表取締役社長）に後日お目にかかった折、フォーラムの話をしたところ「スケジュールが入っていて行けなかった、残念だ。」とおっしゃって、最近時間を見つけて脚本を書いているとそつと教えてくれた。私的な内緒話だったかもしれないが嬉しい話だ。

北海道において観光は重要な産業で農業産出額（1兆円）、漁業生産額（2580億円）に対し1兆3千億円の観光消費額がある。つまり観光は農業と漁業を足したくらいのパワーなのである。特に北海道ではMICEメイス（Meeting・Incentive・Convention・Exhibition）に力を入れて国際的なコンベンションは海外客の誘致にも繋がる重要なファクターと言える。今回のフォーラムや「旅のアジアTV番組&映画グランプリ」に対する期待は大きい。

フォーラムは地元新聞でも高く評価され、参加者の評判はすこぶる良かったことを最後に述べておく。

「ホンネで討論」がみえた札幌大会

鈴木典之

中国代表団の到着遅れで開会式が繰り下がり、代わりに夜の部の作品視聴会

が日・韓両国だけで先行することになった。突然その司会役に指名された。準備も打合せもなくマイクを渡されたが、作品検討の意見交換を活発に運ぶことだけ心をかけた。とかく韓・中は個人の意見となると口が重く、自己主張はむしろ避ける傾向がみられて、毎年物足りなさを感じていたからだ。

上映した2本の作品、韓国の「私の故郷」（MBC）と日本の「命の値段」（札幌テレビ）が、共にタイムリーな社会派ドキュメンタリーで、関心呼んだことも幸いして、質疑も多く、制作者との対話もはずんだ。

「私の故郷」は、秘境の山里の乱開発で自然環境や歴史的風物が破壊されるのを憂い、「命の値段」はガン治療の高額費用を庶民の家計簿から追及している。国の別なく誰もが納得できる問題提起になっていった。場内から賛辞が集まったのは当然だが、司会役としてはもう一歩踏み込んだ討論を、実は期待した。例えば、たまたま双方の作品には「開発は生活の質の改善のため」というセリフが出てきたが、このフォーラムでは「生活の質」とはどういうことか？」で、掘り下げて論じ合ってみたいのだ。国情の壁を超えて、ホンネで討論の「土俵」が築けるかどうか、フォーラム継続の意味だろうと、筆者などは考えている。

だが、札幌大会は、正にこの点で、大いに進歩し、手応えが得られた。

大会の「柱」となり、カンフル剤ともなったのは、2日目に組まれた緊急シンポジウム「震災 テレビはどう伝えたか」だった。3・11震災に韓・中両国も関心が高いと見抜いた実行委の見識もさすがだし、意欲的運営に献身してくれた現地スタッフ（長・林健嗣札幌テレビ執行役員）のお蔭でもある。

各国2名ずつのパネリストが示した個人的発言は傾聴に値した。中でも、日本の金平茂紀氏（TBS「報道特集」キヤスター）の被災現場情報の鋭さとさつくばらんな発言とが会場に緊張とごみを与え、韓・中側の口を軽くさせた功は大きい。まだ原則論的な表現ながら、両国からの大胆な個人的意見の表明は、これまでのフォーラムではみられなかったものだ。この雰囲気があれば、互いにホンネで討論の「土俵」が実現できそうだと筆者はうれしく思った。

課題は、韓国や中国で開かれる大会での運営姿勢にあるが、時代の流れも日本側の思惑に味方しているように感じるのは楽観的に過ぎるだろうか。

ドラマ分科会 堀川とんこう

これだけの規模の国際集會を準備し運営する苦勞は如何ばかりであったらうと、そのことを強く感じながら過ごした4日間だった。

資金の調達、韓中からやってくるゲストの接遇、会場の設営、上映作品のスー

制作者フォーラム札幌大会

SAPPORO HOKKAIDO JAPAN
中日韓
 11th
 2011
 第11回 日中韓テレビ制作者フォーラム札幌
 第11回 한중일TV프로듀서포럼
 第11届 中日韩电视制作者论坛



鄭秀雄常任委員長



開会挨拶・
今野勉放送人の会代表幹事



歓迎歓迎挨拶
柴田北海道経済部観光振興監



乾杯の発声
王鋒中国芸術家協会秘書長



開会式の「江差追分」
民謡歌手カズミさん



開会式の司会
中田美千子氏



林健嗣大会実行委員長



大山勝美
放送人の会特別顧問



アспенホテル開会式場



正面ステージの大画面。
原語の音声と他の2国の字幕が出る。



↑大会会場・客席風景
NHKのカメラが入っている →



黄大竣韓国PD連合会会長



韓国「向かい合って笑おう」
李昌鏞氏



共同TV「フリーター家を買う」
橋本美美氏



NHK「嵐の気仙沼」
久保志穂氏



韓国MBC「私の故郷」
李廷植氏



北海道TV「ミエルヒ」
藤村忠壽氏



札幌TV「命の値段」
佐々木律氏



中国「暑立里」
李業威氏



中国「野鴨子」
佟奉燕氏



サッポロ・ビアガーデン
焼き肉食べ放題

第11回 日韓中テレビ



クラーク博士像



北大構内のポプラ並木



緊急フォーラム

「震災
テレビはどうつたえたか」

9月23日



モデレーター 音好宏氏



NHK 鎌田靖氏



TBS 金平茂紀氏



村上雅通氏



曾根英二氏

会場からの発言者



韓国KBS 金洞興氏



韓国KBS 黄大竣氏



四川電視台 高松氏



四川電視台 李勁峰氏



原田令嗣氏



中町綾子氏



ドキュメンタリー討論の司会
鈴木典之氏



ドラマ討論の司会
堀川とんこう氏



討論総括の司会
山田尚氏



討論の総括
河野尚行氏



渡辺紘史実行委員

長沼士朗実行委員



参加記念トロフィーの贈呈



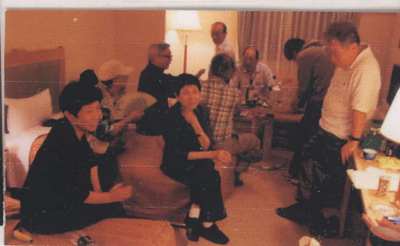
参加記念トロフィー



フォーラムへの貢献賞
王占海氏



この夜松尾ホストはピンクのネグリジェ



松尾ハースナツプ

パリの作成、通訳などスタッフの手配。考えるだけでも気が遠くなる。

実行委員の諸氏の奮闘を心からねぎらいたい。こちらは何の手伝いもせずにお客さま顔で参加させて貰っただけと思うと身の縮む思いである。

その費やされた膨大なエネルギーを考えると、なにを成果と考えるか、総括はなかなか難しいと感じた。

ドラマの参加作品は4本、日本「フリーター家を買う」「ミエルヒ」、韓国「向かい合って笑おう」、中国「野鴨子」だった。

最終日にドラマ分会というのが予定されていたが、時間の都合、各国のスケジュールの都合だったのだろう、制作者が膝を突き合わせて細かい論議をするというにはならなかった。

プロデューサーたちは、自国の作品が立派な企画意図を持っていることを長々話すのだが、そういう意図で作ると何故こういうドラマになるのかまで話がすすまない。意図が立派ならドラマが面白いということにはならないわけだが、国際的な会合では発言はこうなりがちだ。ドラマは芸能だ。芸能は時にはお行儀が悪く扇情的だ。だが、それを契機にしてドラマは制度や習慣を逃れていく不思議な力を持っている。「金八先生」で人気が出たのは決まって不良役の生徒だった。建設的な企画意図は、おそらく制度が許す範囲を逸脱することができないだろう。

作り方のうまさという点では日本の2作品が抜きんでいていたが、両国からそういう発言はなかった。出席者はどこことなく管理職のような感じがした。

韓国の「向かい合って笑おう」には驚きの背景があった。内容は韓国の青年とベトナムから来た不法滞在の女性との恋物語だが、制作費が「多文化基金」から出たという。(多文化)とは(他国人と結婚したカップルがいる家族)という意味だという。あの家は多文化だ、という具合に使うらしい。基金はその国際結婚を援護するためのものだろう。人の交流を含む国際化、多民族化が日本よりはるかに進んでいることがしのばれて衝撃を受けた。

そのことから思ったのは、このフォーラムの意味は議論の中身ではなく、物語や映像がおのずと含んでいる衝撃を参加者がそれぞれに受け止めて帰るところにあるのではないかということだ。議論の表には出てこないが、私たち自身と遠来のゲストが、作品を持ち寄るといってまさに多文化から衝撃を受ければ、それが成果なのだろうと思う。

***** 原点を考える機会

札幌テレビ放送 佐々木 律

初めて日韓中フォーラムに参加させて頂き、ドキュメンタリーとは何か――

原点を考える、とても良い機会となりました。

私たちは、がん患者の経済的負担について4年前から取材が続いています。今回のフォーラムでは、問題提起をした2009年のドキュメンタリー「命の値段」が患者、闘いの家計簿」(40分)をご覧頂きました。そして、韓国の参加者から頂いた2つの質問こそが、「原点」帰りの問いかけとなりました。

1つは、「なぜ4年も続けてこられたのか、トップからの指示があったのか？」という問いでした。

私たちの取材のきっかけは、2007年5月、がん患者から報道部にかかってきた1本の電話でした。「私たちががん患者会で、今度、北海道に経済的支援を訴えたい」という内容でした。がん患者に経済支援？何の事やらと取材を始めるのと、ごく普通のサラリーマン家庭が、ごく普通のがん治療で貧困へと追い込まれる現実があることを知ったのです。衝撃的な現実でした。「もつとこう変われば、楽になるのに……」というがん患者の思い。そして、国民健康保険制度や民間のがん保険はなぜ救えないのか？何が問題なのか？という記者の疑問こそが、伝え続ける原動力でした。そして気がつけば4年が経っていたわけですが、なぜ続いたかを振り返るならば、苦しみ続ける人に背を向けなかったこと――、だったのではないかと思います。そして、もう一つの問いは「この番組

には、解決策が描かれていないのでは？」という問いでした。これは、番組を制作する時点で悩んだ点でした。

医療の進歩とともに生まれてしまった、命とお金を天秤にかけるという壮絶な現実。その解決策は、4年追い続けているいまもまだ見えていません。1人年間1,000万円を超える抗がん剤治療費をすべて公的医療保険で賄うか、民間の保険で自己責任として賄うか。わずかな余命のためにどれだけお金を使うかという死生観。これは本当に難しい問題です。

私は日々のニュースに関わりながら、「テレビは一過性。一度伝えたことで満足してしまつてはいないか」と自戒することがあります。

最初の放送で解決策を示せなくても、現実を知ってもらうこと、考える場を提示すること、一過性にせず、解決策に向けたレールを敷き続けること、そうすれば、生きるための尊厳をどう守るかという深い問いにも答えを出せるのではないかと信じています。

自分の役割を問い直す

NHK文化福祉番組部ディレクター

久保志穂

大震災から半年後に開催された今回のフォーラム。参加されていたごなたも特別な思いであったことと思います。被災地取材を続けていた私としても参加

させて頂く上での最大の関心は「いま私たちに何が求められているか」でした。自分が取材でお世話になった人々を巻き込んだ今回の震災を今後どのような見つけていけばよいのか分からなくなっていたからです。

そもそも、中国・韓国ドキュメンタリー作品に触れるのは今回が初めての経験でした。インタビュの撮り方一つとってもその表現手法の違いに驚くことばかりでした。

そうした中で、「嵐の気仙沼」は一見何の変哲もない港町の日常に隠された人と人との絆の大切さ、それをいかに興味深く見てもらうかという仕掛けに力を入れました。嵐の日という時間の中に全てを集約させ、その時の現場の声のみを切り取っていくという方法が海外の多くの方にも興味を持って頂けたのは大変嬉しいことでした。しかし、それは別に、多くの制作者の方と交流をする中で再認識したのは、異文化間での手法の是非を議論するのではなく、番組に込めたテーマ、対象者や土地への想いやその事実の大きさがいかにちゃんと届いているかが最も大切ではないかという当たり前の気持ちでした。多くの制作者の方が議論の果てにこうしたことを見直したと話されていました。

その上で、東北の被災地で今後取材していくべきことはなんだろうと考えました。多くの方からの回答は、今は「現場にいること」そのことに意味を感じる

こと、そして「事実」は何かを見極めて「複雑」に伝え続けることでした。シンプルに伝えようとしたら、枠にはめてしまおうとするほどに覆い隠されてしまう事実が出てくる。その意味や評価はまだまだ分からないかもしれないが迷いも含めてそのまま表現して欲しいという要望でした。

実際に、いま被災地において事実を淡々と伝えること以外に出来ることは何かと考えると大変無気力になります。個人の努力で出来ることはとっくに終わっていて、それでも出口が見えない中、こちらから高い理想を掲げることなど出来ません。この事実を愚直に伝えていくことしかなく、これまで表現の手法にばかりに捕らわれて番組を見ていた自分が恥ずかしくなりました。今度は継続して事実を積み上げていくことで被災地の気仙沼の人たちに何か恩返しが出来る番組を作りたいと気持ちを新たにしました。

フォーラムと大震災

長沼士朗

札幌大会は、ここ数年の日韓中フォーラムの中でも最も一体感が高まった大会であったと思うが、そのいちばんの理由は、2日目の午後に行われた「緊急フォーラム」で、東日本大震災に関わる問題が取り上げられたことによるものと思われる。

その主な内容は、韓国KBS制作のドキュメンタリー「震災後100日 揺れる日本」の上映と、3国の震災報道番組の関係者による「震災とテレビ」に関するシンポジウムであったが、この中で私には特に印象に残ることが二つあった。

その一つは、シンポジウムの中で日本のパネリストから、福島原発のメルトダウンの情報が長い間途絶えてしまったことに対して、国は都合の悪い情報を隠すことがあり、放送を含めたマスメディアはそれを乗り越える努力をしなればならないという指摘がなされた。

この議論の中で、最近中国で起きた新幹線事故に対するマスメディアの対応にも話題が及んだが、中国の放送人も参加している前で、こうした議論がなされたことは、これまでのフォーラムを振り返ってみてもかなり画期的なことであった。これに対する中国の代表者の反応も冷静で好感が持てたが、私にとってこの話し合いは、国の枠を超えて語り合える放送人のコミュニケーションの可能性を実感させてくれるに充分であった。

もう一つは、KBS制作の「震災後100日 揺れる日本」であるが、この作品は原発事故を歴史的、総合的な視点に立って捉え、現代社会と原発の問題を鋭い批判精神をもって描いていた。街に映される鉄腕アトムの映像のモニターが、戦後の日本人の原子力に対する感覚の甘さを苦々しく伝えて、印象的であ

った。

ところでこの緊急フォーラムは、たまたま大震災が発生したことにより生まれた企画だが、私にはこの企画が、今後日韓中フォーラムを継続し、さらに充実させていくための重要な資料を提供してくれているように思える。

もちろんフォーラムの第一の目的は、3国の作品をお互いに鑑賞、批評し合うことにより、放送人として東アジア、ひいては世界への関心を高めることにあると思うが、それに加えて、3国の放送人が共通して抱えている目の前の課題について議論する時間をつくること、またそうした課題について国の枠を超えて作られる作品の交流などが、フォーラムの一体感を増すうえでより効果的であることを教えてくれたような気がする。

参加者の一体感が増せば増すほど、お互いの作品の交流や、共同制作への道にも、自ずと現実味が増してくるようになる。

“地域発”日中韓のドキュメンタリー

曾根英二

千歳からJRに乗って走り出したとたん戦闘機が4機、次々に上空を通過していく。陰影のある黒赤い夕空がなんとも美しく、ここはいろんな意味で北の大地なのだ教えてくれる。クラークの北大でフォーラム、やっぱり前向きな気持

ちになるから人というのはおもしろい。
一衣帯水の3カ国のテレビマンが集
まって今年も、それぞれの国がテレビ挑
戦をみせてくれた。体制や政治状況の違
う3カ国だがよく似た3カ国というこ
とだろうか。韓国のドキュメンタリー

こたわって向き合うことかから名作や
問題作が生まれてくることを改めて教
えてくれる。

『私の故郷』は大型開発やダム建設に翻
弄される村人や、コミュニティーの分裂
が描かれる。「私が故郷を守るから」と
いう女性のたくましさには勇気づけら
れる。言論の自由を謳歌しているはずの
日本に比べるとまだまだ微妙な神経を
使うという状況の中での挑戦を多とし
たい。同じ韓国のテレビが特集した『震
災100日 ゆれる日本』は未曾有の震
災被害と原発事故に迫る意欲作だった。
異国の被災地を歩き、原発導入へ舵を切
った中曽根元首相まで訪ねてインタビ
ューしていく。「日本は韓国にとって一
つの憧れであり、模範でもあったはず。
震災の対応にがっかりした」という旨の
発言が韓国人ジャーナリストからあつ
た。政府や自治体、電力会社だけに向け
られたものではあるまい。日本のジャー
ナリズムはどうなのか。真実を伝えてい
るのかという私たちテレビマンに向け
られた厳しい問いであったと私は思う。

中国からは少数民族の村がバスケッ
トボールで村おこしを行っていくドキ
ュメンタリーが出品された。手縫いで修
理するボール、松明を灯して一個のボー
ルを捜したという夜のシーンに韓国人
ジャーナリストから「再現か？」と異論
がだされた。事実に基いての再現と中国
側の釈明。「やらせ」になりかねないと
の議論も戦わされた。ドキュメンタリー
と演出、メディアと権力など考えるべき
課題は多い。地球村と言われるほど狭く
なっている世界にあつて、ファアーイス
ト3カ国の放送人がコミュニケーショ
ンの場を年に一度持つ意味はやはり大
きいと思う。北の札幌に集ったテレビマ
ンたちが刺激を受けたことは間違いな
いと思う。

放送人の会の皆様へ

中崎 清栄

意義あるフォーラムに参加させてい
ただき、心から感謝しています。

日本からは台風避難で久々に賑わう
漁港の人間模様を描いた『嵐の気仙沼』、
北海道発のドキュメンタリー『命の値段』
の、ともに地域をテレビカメラが密着し
た秀作が上映された。人の住む地方にこ
そ題材が横たわり、個としての放送人が

辻本が、伊藤さん(当会報編集長)と
約束した写真(DVD)ですが、松尾バ
ーで、床に座る藤久先生なんて、ちょつ
と撮れない写真もチラホラあつて、金沢
でも楽しんでます。

NHKの久保さん(志穂「嵐の気仙
沼」ディレクター)の写真が突出して多

いのはカメラマンの気持ちでしょうか。
あの後、私どもは東北へ行き、被災地
を巡りました。

「調査情報」の金子さんから、TBS
三陸臨時詰め所の龍崎さんを教えてい
ただき、きめ細かく連絡していただきま
した。おかげで龍崎さんと気仙沼でお会
いし、情報を聞いた上でレンタカーを走
らせましたので、効率よく廻ることがで
きました。

半年たった現地ですが、どこも壊滅状
態…。

龍崎さんから、「陸前高田へ絶対行き
なさい。行かないと後悔します」と道を
親切に教えていただき、何もない街に衝
撃をうけました。

仙台空港だけがもとの姿に戻ってい
るようでしたが、それとて…

百聞は一見にしかず…どこまでも続
く被災地の現状に心が痛みました。

気仙沼では、久保さんの取材先、お風
呂屋に立ち寄りみてみたところ、ご夫婦と
お会いすることが出来、久保さんの話で
和みました。

「あの子は男風呂にも平気で入るよ…
あんな子いないよー」と、大きな被害を
受けながら、楽しそうに話す、魅力的な
ご夫婦…。

これも「放送人の会」のおかげです。
感謝の気持ちをこめて辻本から預か
ったDVDをお届けします。

放送人の会のHP模様替え

放送人の会のホームページの内容が少
し変わりました。これまでパスワードが
必要だった会員交流のページをやめ、新
しくブログのページを作りました。現在
3名の日記を掲載しています。新しく自
分も日記を書きたい、あるいはご意見
ご感想、ご質問は blog@hosojin.com
あてメールを送ってください。送ってい
ただいたものはブログの中のスペシヤル
コーナーで扱う予定です。

また、会報もPDFでご覧になれます。
現在前号が入っていて、今号は数日中に
入りますが、これからバックナンバーを
収録し、いずれ全部収録する予定です。
どうぞご利用ください。

新会員

臼杵敬子 韓流ドラマ、韓国社会・歴
史が専門。著作「現代の慰安婦たち」韓
国ルポ。元NTVでモーニングショーの
構成・Dを担当。

原田令嗣 現在ASIA静岡フルパ
ワー代表。元NHK報道番組P。作品「シ
リーズ地球白書」「N特・韓国財閥総帥」。
ソウルASIA大会、オリンピック放送
担当。元衆議院議員。日韓中テレビ制作
者フォーラムの立ち上げに参加。

第28回放送人句会

◇平成23年9月14日(水)

◇於：赤坂・麦屋

◇出席：上村晁蛙、荻野慶人、鶴橋康夫、

豊田まつり、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、

林備後、藤森いずみ、堀川とんこう、松尾馬笑、

森治美、西川阿舟(13人) ◇不在投句：大山勝美

◇兼題：仲秋、案山子、蠮螋、カメラ

中秋や覚束なきは人と雲

頭こらへたれやる気のうせし案山子かな

裾口こらへにいて蠮螋の鎌青し

A Dのぼてたるような案山子かな

村は寝て星は案山子に降るばかり

蠮螋や次の何かに化けた気に

古書市の美人写真に秋の影

カメラ前虚実問いたき夜半の秋

子かまきりけなげに鎌を振りかぶる

週明けの自動扉にかまぎつちよ

カメラマン色なき風も映しけり

達観し土手に横たう捨案山子

捨案山子火に焼べられて山暮るる

仲秋や凶事多く巡りきぬ

友が計に詫びたきことあり仲の秋

秋遍路カメラで覗く延命寺

仲秋や音沙汰ありて家族葬

名月や母在りし日の奥座敷

かまきりが聞き耳立てるカメラ位置

へへのと笑みたるまゝに捨て案山

蠮螋や干したシートで何を待つ	いずみ	蠮螋に退路を断つるの気迫見ゆ	慶人
日の丸を首に巻かれて案山子立つ	まつり	蠮螋の斧に触れたいちよつとだけ	まつり
赤坂の監視カメラに映る月	備後	化粧待ち蠮螋のわきカメラ置く	備後
捨案山子魂のなき軽さ良し	康夫	地異の果て案山子の弓矢誰ぞ打つ	馬笑
ぐみの実をひとつふみみてカメラマ	ぼん太	蠮螋の指揮者のやうに枯れてをり	もとを
肩凝の少し癒えたり秋半ば	備後	蠮螋や起重機の傍そろり寄り	勝美
月浴びて軽き殺気やカメラマン	康夫	かまきりが聞き耳立てるカメラ位置	とんこう
手ぬきせし案山子の頭ポリバケツ	勝美	アングルに迷い乱写の秋祭り	勝美
中秋の畑を抜けゆく列車あり	治美	蠮螋や背の君食んで瞑目す	馬笑
蠮螋のいま恍惚と喰われおり	康夫	夕食を脱けていざよふ月を撮る	阿舟
仲秋や淋しきことを妻のいう	康夫	仲秋の月問ふメール上海へ	まつり
蠮螋の斧ふつて猫おどろかす	ぼん太	死人らは中秋の月抱きしめて	文博
国道を捨てられにゆく捨案山子	まつり	蠮螋や遊女の墓に没しをり	もとを
休耕田主面なる捨案山子	もとを	仲秋の月の琵琶湖に雲巨き	きよし
頑として案山子はへのへのもへじなり	ぼん太	仲秋の月の出を待ち薪能	きよし
稲妻を真つ直ぐ見据ゑ案山子かな	いずみ	カメラ買ひ秋葉の街の颯雲	いずみ
人混みに案山子となりて動かさる	治美	仲秋や今宵ディアナのあてやかさ	晁蛙

次回放送人句会 ◆11月9日(水) 18時頃から、19時投句締切(7句投句) ◆於：赤坂・麦屋 (Fax 03-3586-0056) ◆兼題：神無月、七五三、大根、台詞(せりふ) ◆特別選者：星野高士

新刊 紹介

あの時、僕らは13歳だった

〜2人の少年が経験した日韓

関係を語る微視的な歴史本



放送人の私(寒河江正)と韓国の天文学者(羅逸星)の2人の対話集が1冊の本になり東京書籍

より発売されています。現在、私がプロデューサーを勤め、放送中のトーク番組「佐藤しのぶ出逢いのハーモニーの司会者佐藤しのぶさんは「私たち大人は次の世代に風化させてはならない事実を伝えるべき使命があります」とこの本を評して下さいました。2人は東京、ソウルと距離的にも離れ、対は単なる友情でなく、ぼくらは何を残し、何を伝えるのかを真剣に話し合い、ご覧頂く内容に纏まりました。先日番組のゲストに詩人の長田弘さんをお呼びした折、本について、詩のような素敵なメッセージを頂きました。「出だしは、この本が1日に5回読める本であればとねがう。最初は黙って…2回目にはことばを声に出して…3回目は好きなページを開けたまま…4回目は言葉を反芻して…5回目はまだ大切にしたい箇所がいくつあるか…長田弘さんの「詩ふたつ」は詩とクリムトの絵が交互登場するたいへん素敵な詩集です。

私たちのこの本もせめて1日に1回、週に5回読んで頂ける本であればと願っています。(寒河江)

「薔薇のある家」は聴きまし

たか 武本 宏一

先ごろ、第48回ギャラクシー賞ラジオ部門で優秀作品賞を受賞したラジオドラマ「薔薇のある家」(NHK・FM)を録音ずみのCDで試聴する機会を得た。これが、久しぶりに接する、正統派ラジオドラマの傑作だった。

出演は奈良岡朋子扮する、半ばリタイヤ中の元大女優と、大竹しのぶ扮する、その付人の二人のみ。

都会のある高層マンションの一室で、深夜二人が対峙している。

元女優は付人に、折角私のところに舞台出演の話が持ちこまれているのに、なぜ受けてくれないのか、と迫る。

しかし、付人は、それは急に出演不能になった俳優の「代役」だろうか、という話で、尊敬するセンセイをそんな惨めな形で舞台復帰させる訳にはいかな、と突っぱねる。

セリフ以外の音と言え、老女優の囁むお新香の音と、二人が揺らすオンザロツクの氷の音だけ。

やがてリスナーは知る、実は二人が母とその娘であり、角逐の根底には以前住

んでいた薔薇の花咲く家と、二人にとつて夫であり父であった亡き一人の男性へのそれぞれの思いが横たわっていることを……。ここでドラマは一気に濃密さを加える。

研ぎすまされたシナリオ(オカモト国ヒコ)に乗って、奈良岡と大竹二人の演技が切り結ぶ、それだけで十分に恐ろしい50分であった。(演出・江澤俊彦 F Mシアター枠で平成23年3月26日再放送)

さて、民放ラジオではこのところトンとラジオドラマの話は聞かないな、と思いつつ10月の改編を見てみると、なんと二、三の枠に「ラジオドラマ」の6文字が踊っているではないか。

一つはTBSラジオの「ラジオシアター」(毎日曜夜9時〜9時30分)。これは、たとえば宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」などの名作を、ドラマに要約するものとのこと。

また同局には、格闘家で俳優の角田信朗が出演する時代劇もある。(毎月曜夜9時〜9時30分「傾いて候」枠中)

ニッポン放送でもこの10月改編からドラマ枠が生まれた、というので番組表をよく見ると……

毎月曜〜木曜夜11時台に「AKBラジオドラマ劇場」なる10分ベルトを発

見。どうやら人気グループAKB48のメンバーが交互に出演して、「初恋」なんぞをテーマにお芝居をするらしい。

「ラジオドラマ復活の秋」と銘打ちそうになった本稿だが、それはちよつと先のことになりそうだ。

「放送人の証言」文字化原稿の注釈づくりボランティアを募ります

1999年から当会の事業活動の一つとしてつづけてきた「放送人の証言」の収録者が、9月末で計160名になりました。このたびNHK放送文化研究所(メディア研究部)、東京大学大学院情報学環(メディアコンテンツ総合研究機構)と放送人の会で、「放送人の証言」のデータベース化・各種研究を共同で行うことになり、一部の「証言」の文字化・文章化がはじまりました。

研究作業の一つに、文字化した証言の「注釈づくり」があります。証言者の話に出てくる番組名や放送日・固有名詞・などをチェックして、簡単な注釈をつける作業です。収録時のインタビューや幹事の方々にお願いをしておりますが、手が回りきれない現状です。

会員の皆様のなかで、この人物と当時の仕事・人名ならわかるという方がいらつしやいましたら、注釈づくりをお願い

できないでしょうか。交通費・プラスアルファ程度のボランティア料しかお支払いできませんが、ご関心ある方は、ぜひ事務局・佐藤または北村充史までご連絡ください。詳しいことをお話しいたします。よろしくお願いたします。

文章化済み証言者30名(収録番号とお名前のみ)

- 4・吉村繁雄 6・西沢實 8・北川信
- 9・八橋卓 10・浅田孝彦 12・関谷
- 則 13・島地純 15・蟻川茂男
- 19・小倉一郎 22・川野楠巳 23・荻野慶人
- 24・山本隆則 25・小川秀夫
- 26・堀江史朗 28・嶋田親一 31・川竹和夫
- 33・岡田太郎 34・香西久
- 39・柳澤恭雄 45・高橋啓 48 A・斎藤守慶
- 55・深町幸男 70・川平朝清
- 71・香川宏 88・山崎俊一 108・佐藤秀山
- 119・山室英男 124・織田晃之祐
- 128・磯野恭子 129・鈴木昭典

編集後記

▼ガラパゴス系のケータイからアンドロメダ系のスマホへと時代は進んでいるが、当編集部はそれ以前の糊と鉄の編集である。大量の写真の処理を人跡まれな孤島でやっている気分だ▼日韓中フオーラムの写真は今回も辻本さんのお世話になった。辻本さんまことにありがとうございます。紙面で公開しなかつた松尾バーの貴重映像が多数あります。見たい方、欲しい方は編集部へご連絡ください(視郎)